
IS ~ 黄金のIS ~

深紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈黄金のIS〉

【Nコード】

N3540Y

【作者名】

深紅

【あらすじ】

世界で唯一ISを使える男織斑一夏だが世に知られてないだけである1人の男はそれよりも前にISを操縦していた！

入学（前書き）

完結目指して頑張りますのでよろしくお願いします

入学

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rを始めますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。身長は低めで、中学生と間違われてもおかしくない。しかも服はサイズがあっていないのかだぼつとされていて買ったばかりの制服を着ている感じがして余計に幼く見える。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

誰も反応せず教室は緊張感に包まれた

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」と少し狼狽えている先生が可愛く見えたのは秘密だ

しかしクラスに男子二人目というのは意外にきついものがある

（まさか、人生のなかで客寄せパンダの役になるとは思わなかったな）

と前を見ると幼なじみの織斑一夏の自己紹介が始まると思っていた

「えー……つと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

だけか？まさかそれだけなのか一夏？周りを見てみる「もつと色々喋ってよ」とか「これで終わりじゃないよね？」的な空気だぞ！これで何も話さなかったら「暗い奴」のレッテルが貼られるぞ

「以上です。」

がたたつ。思わずずっこける女子が数名いた、どんだけ期待してたんよ。

「あ、あの一」

と涙目の先生を可愛いと思っていると、凄まじい音が聞こえて音の方を見ると頭を押さえた一夏の姿があった

「いっー！？関羽」

バアンツ！一夏それは死語だぞ

「誰が三国志の英雄か、馬鹿もの」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたのですか？」「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかった」

誰だあの人は少なくとも俺は聞いたこともない優しい声に少し動揺していた

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと…」

さっきの涙声はどこへやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいくらの声と視線で担任の先生へと応えている。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるなが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんという暴力宣言さすが一夏の姉。

だかしかし、教室には困惑のざわめきではなく黄色い声援が響いた

「キヤー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私お姉さまに憧れてこの学校に来たんです！北九州から」
いや別に何処でもいいが…

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

ここまでくると宗教かなんかがあってもおかしくないな

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。」

それともなにか？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

いや何処のクラスに行っても千冬さんだったら代わりないと思うがな

「キヤアアアアアアッ！お姉様！もつと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

元気というか何人が変態がいたぞ！今！

「で？挨拶もまともにできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺はー」バアンツ！本日何度目の音。そしてー

夏学校の担任が自分の姉でも先生と言わないとマズイだろ

「はい、織斑先生」

ーとこのやりとりがますますたのか姉弟なのがばれたようだ

「え……？織斑君ってあの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男でIS使えるってのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。変わってほしいなあっ。」

最後のは聞かなかったことにしよう。

・
・
・
・

「じゃあ最後に矢車君お願いします」

おっ、ようやく俺か名字が「や」だから最後かなと思っ
ていたけど
本当にさいごになるとは、まあいいや今は自己紹介だ

「矢車賢司だ、知ってると思うが俺もISが使える。なにかと迷惑
かけるかもしれないが三年間宜しく」

入学（後書き）

次回は主人公のプロフィールを書かないと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3540y/>

IS ~ 黄金のIS ~

2011年11月8日20時58分発行